

永瀬清子さんのこと

— あげがたにくる人よ —

尾形明子

あげがたくる人よ

あげがたくる人よ／ててっぼっぼうの声の
する方から／私の所へしずかにしずかにく
る人よ／一生の山坂は蒼くたとえようもな
くきびしく／私はいま老いてしまつて／ほ
かの年よりと同じに／若かつた日のことを
千万遍恋うている

その時私は家出しようとして／小さなバス
ケット一つをさげて／足は宙にふるえてい
た／どこへいくとも自分でわからず／恋し
ている自分の心だけがたよりで／若さ、そ
れは苦しきさだつた
その時あなたが来てくれればよかつたの
に／その時あなたは来てくれなかつた／ど
んなに待っているか／道べりの柳の木に云
えばよかつたのか／吹く風の小さな渦に頼
めばよかつたのか

あなたの耳はあまりに遠く／茜色の向うで
汽車が汽笛をあげるように／通りすぎてい
つてしまつた

もう過ぎてしまつた／いま来てもつぐなえ
ぬ／一生は過ぎてしまつたのに／あげがた
にくる人よ／ててっぼっぼうの声のする方
から／私の方へしずかにしずかにくる人
よ／足音もなくして何しにくる人よ／涙流さ
せにだけくる人よ

〔あげがたにくる人よ〕

詩集「あげがたにくる人よ」を手にした時
の感動を忘れない。なんとという心にしみる懐
しさなのだろう。誰の心の中にも、おそらく
はその底の方で渦巻いている、もはやとり戻
す術ない日々。ただ涙するしかない痛み。ど
の詩も過ぎてきた生への、いわばレクイエム
なのだが、八十歳を越えてなおいつそうみず

みずしい感性は、永瀬さんの生きてきた時間
の豊かさと重なり合つて、つややかで、しか
も清らかな艶をさえたたえていゝ。

永瀬清子の名を私が知つたのは、昭和八年
から十六年まで、長谷川時雨によつて「女人
芸術」の続きとして出されたリーフレット
「輝ク」(全一〇二号)によつてだつた。知識
婦人を総動員した感のある「輝ク」は、左傾
から、やがてファシズムの嵐の中で銃後運動
に組み込まれていく女性の姿が鮮やかに浮か
ぶ魅力的な小冊子なのだが、新鋭の詩人とし
て、詩、評論、エッセイ、通信に、永瀬清子
の名はしばしば登場する。それらを辿るなら
永瀬清子という詩人の日常生活までが想像で
きる。岡山の人で子供が四人いること。明治
生命に勤める夫が召集され戦地で負傷、広島
の病院に入つていゝこと。東京と岡山を行き

来し、背中に生まれたばかりの子供を背負い、三人の子の手を引き、時雨のもとを訪ねたり、詩人たちの会合に出席していること等々。

そして、昭和十六年九月の「輝ク」百号、

長谷川時雨追悼号の永瀬清子の詩「哀傷歌」は、誰の追悼よりも時雨への思いにあふれていた。永瀬清子は私にとって「輝ク」の人だった。だから三年前の秋、新聞の文化欄の片隅に永瀬清子の名を見ても、なかなか重なり合わなかった。「あけがたにくる人よ」（昭六二思潮社）が「地球」賞を受賞したことが報じられ、その略歴に岡山在住、農業のかたわら同人誌「黄薔薇」を主催、詩歴は六十年にわたるとあった。年が明けてその詩集は文化出版局の「現代流賞」をも受賞した。

タイム・スリットに落ち込んだように驚いたのはひたすら私の不勉強で、永瀬さんが大変に有名な詩人であることを、私は知人達にあきれ顔で教えられた。永瀬さんの詩集を何冊も机の上に積みあげ、一ヶ月近く、私はただその詩の世界で過し、三月末の受賞式に上京された永瀬さんにお目にかかった。

三木卓氏のご好意だった。少し背中を丸めた永瀬さんは美しく気品があって、太いしっかりとした声で「輝ク」のこと、ご自分の詩

の生活をあふれでるように話して下さった。

次の年の三月の終り、永瀬さんを岡山に訪ねた。小学校四年生の次男のダイを連れての訪問だったが、古いお宅はすみずみまで永瀬さんの雰囲気のみちていた。明日は深尾須磨子の命日だからと床の間には「神笛を吹き拾ひきあめつち成りぬ」という深尾須磨子の掛軸がかかけられ、彼女が好きだったという紫大根の花が壺いっぱいにあふれていた。

文学辞典風に永瀬さんを記すなら、明治三十九年岡山に生まれ、父親の仕事の関係で金沢の女学校を卒業、佐藤惣之助に師事。昭和五年第一詩集「グレンデルの母親」を出版後、北川冬彦らと行動を共にし、女流詩人として認められる。おもな詩集には「諸国の天女」（昭一五）「大いなる樹木」（昭二二）「美しい国」（昭二三）「薔薇詩集」（昭三三）等々がある。高村光太郎は「諸国の天女」の序文で「その詩には日々の生活が応へ、深い社会意識の響音を底にきくが、それが不思議に鍛練された魅力ある言葉の肉体を持つ。地上に住まなければならなくなった天女の肉体を思はせる。」と書く。宮沢賢治を誰よりも早く評価し深い共感を示す永瀬さんの詩の、美しく典雅な言葉の間を流れるヒューマニズムと、

詩こそ人類を救える唯一のものとする信念は、詩生活六十年間変わることなく、永瀬さんその人となつてゐる。

上京が決まると細かな文字でスケジュールをびっしり書いた葉書が何枚も届く。背中をまるめ、重いボストンバックを下げて「汽車の震動は体にいらしいわ」と元氣いっばいに降りてこられる。食事しながらも乗り物の中でも若い日の思い出を永瀬さんは語り続ける。経てきた時間がかし役に立つのならといった思いが素直に伝わり、別れがたくなる。

昨年の秋、詩人の原子朗氏の銀座の個展会場で、思いがけずに永瀬さんの「あけがたにくる人よ」のテープを聴かせていただいた。ちょうど来合わせていた坪内逍遙研究者の先輩が突然「実は昔、永瀬さんに詩を見てもらおうと手紙を書いたことがあった」と告白し私の「えー」という声にまるで少年のようにはにかんだ笑顔を見せた。そして、我家の少年ダイは、詩人のおばあちゃまにお会いして以来、急に詩が好きになって、先日、授業参観で学校に行ったら、「スズメを見た」と始まる詩が廊下に張り出されていた。